HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	定型表現の反復が促す英語習得プロセス ： 使用基盤モデルの観点から［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	泉, 瞳
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16558号
Issue Date	2025-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95691
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Hitomi_Izumi_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　氏名：泉　瞳

学位論文題名

定型表現の反復が促す英語習得プロセス― 使用基盤モデルの観点から ―

・本論文の観点と方法

母語習得について、チョムスキーによる生成文法では、生得的に備わった普遍文法に対し、経験が与えられれば、普遍文法のパラメータ値が決まり、瞬時にして文法が獲得されると仮定された時期があった。しかし、近年では（一部は他の霊長類と共有するような）様々な（社会）認知スキル、情報処理スキル、学習スキルをもとに、子どもは他者との言語使用を通して局所的な一般化を繰り返すことで徐々に文法を構築していくとする「使用基盤モデル」という考え方が認知言語学において唱えられてきている。この考えでは、私たちの言語知識は形式も意味も具体的で使用頻度の高い定型表現から、形式も意味も抽象的な規則まで、中間にさまざまな抽象度・使用頻度のスキーマ群を擁する膨大で余剰的なネットワークをなすとされる。この使用基盤モデルが第二言語習得・外国語教育においてどの程度妥当するかを民間の児童英語教室の綿密な授業観察記録に基づき考察し、日本の小学校の英語教育に対しての示唆を与えることを目指したのが本論文である。

・本論文の内容

本論文は全８章で構成される。第１章「序論」では、2008 年の学習指導要領改訂から始まる日本における小学校英語教育の理念の変遷を概観するとともに、これまで指摘されてきた小学校英語教育の問題点（専門的な指導者の不足、効果的指導法の欠如、生徒の英語学力の二極化など）がまとめられた上、本論文の研究目的と構成が述べられる。

第２章「本研究の理論的背景」では、本論文が理論的に依拠する使用基盤モデル、構文文法、メンタル・レキシコン、対話統語論といった認知言語学の諸理論が概観された後、使用基盤モデルの立場からの母語習得・第二言語習得の先行研究が紹介される。また、これらの理論において重要な役割を果たす「定型表現」の定義・特徴をめぐる先行研究に検討が加えられる。最後に第二言語指導法の主要なアプローチが概観され、本論文との関連が論じられる。

第３章「B.B.メソッドの概要」では、小学生に対する英語指導の事例研究として本論文が観察対象とした「B.B.メソッド」と呼ばれる指導法についてその特徴を明らかにする。B.B.メソッドはセルム児童英語研究会の難波悦子氏によって 1970 年代後半に構想され、1980 年に提唱されたもので、日本各地の個人英語塾を中心に、一部の小学校でも実践されている指導法である。この指導法では B.B.カードと呼ばれる 64 枚の英文カードとそれに対応する絵カードを用い、ビンゴ、すごろく、坊主めくりといったゲームや、英文の内容をめぐるやりとりなどを通して文法を帰納的に身につけさせることを目指している。さらに、64 の英文（B.B.英文）を「固定性と可変性」「機能性」「音声的・韻律的特徴」「頻度」の観点から考察し、特に頻度については BNC コーパス、ジーニアス英和辞典第６版の見出し語ランクを参考にして、B.B.英文がおおむね定型表現から構成されている

ことが論証される。また、B.B.カードの英文と小学校英語教科書 New Horizon Elementary（東京書籍）5・6年生用に含まれる英文を詳細に比較し、前者の方が文型、動詞句の点でバリエーションに富むとともに、時制とアスペクトについても教科書では扱われていない項目が含まれていることが示される。

第4章「研究課題と手法」では、先行研究が指摘する日本における小学校英語指導の課題を 1. 定型表現と文法知識習得の相互作用、2. 教室でのインプットの質と継続性、3. 文法を明示的に教えない教育が中学以降の英語に与える影響、の3つの観点から整理し、以後の章で順に考察されることが述べられる。

第5章「研究Ⅰ　擬似響鳴を活用した指導 : 対話統語論の観点から」では、2021 年 6 月から 9 月にかけて観察された、B.B.メソッドを用いた学習歴3年目のクラスと5年目のクラスのそれぞれ5回分の授業記録が「響鳴」という対話統語論の道具立てを用いて分析される。私たちが会話をおこなう際に、一から規則に従って語を組み合わせて発話するわけではなく、先行する相手の発話をいわばリサイクルして、類似した形式を用いる傾向があることが知られている。このように先行発話との類似性を活性化することを「響鳴」といい、母語習得にあたって親と子の発話間の響鳴が大きな役割を果たすとされる。本章では、教室での第二言語指導において教師が生徒とのやりとりの中で意図的に繰り返しや模倣を促進する現象を「擬似響鳴」と名づけ、学習歴3年目と5年目のクラスにおける教師と生徒との間のやりとりを比較した結果、前者では語句の代入および/または付加のみを含む擬似響鳴が中心であったのに対して、後者では語句の代入および/または付加に伴う語形変化を含む擬似響鳴が多く観察されたことが示される。このことは3年目のクラスでは B.B.英文の意味理解と文構造の定着が重視されるのに対して、5年目のクラスでは文法を内在化することが目指されていることを示唆する。最後に、母語習得における響鳴と第二言語指導における擬似響鳴が比較され、前者が親子間で無意識のうちに生じ、響鳴の統語単位が習得が進むにつれて大きくなるのに対して、後者は教師が意図的に設計したインプットを通じて促されるものであり、響鳴の単位も最初から文レベルである点で異なるとされる。また、教室でのリピート、リキャストが響鳴の一種として捉え直せる可能性が示唆される。

第6章「研究Ⅱ 定型表現の反復とメタ言語の活用による言語習得プロセスの解明」では、二人の児童（学習歴1年目の小1女子と3年目の小4男子）を追跡対象として、彼（女）らがどのような段階を踏んで英語の知識を身につけていくかが、2019 年 6 月下旬から 2020 年 2 月下旬にわたる 25 回（小1女子）、23 回（小4男子）の授業（および一部オンラインでおこなわれた 2021 年 6 月から 9 月の授業）の観察データをもとに記述・分析される。特に学習歴1年目の小1女子について、文法の理解、読むこと（文字と音）、産出（発話・作文）の面から詳細な記述がなされ、教師が B.B.英文について文法的気づきを促す問いかけを繰り返し日本語でおこなうことにより、最初はひとかたまりの音声と意味の結びつきだったものが、徐々に主語―述語に分節され、目的語・補語・修飾句の概念的区別ができるようになり、それと並行して読む力、産出の力もついていくことが時系列に沿って描写される。

第7章「研究Ⅲ 小学生時代における定型表現の反復学習が中学以降の英語学習に及ぼす影響：元学習者のインタビュー調査に基づく考察」では、小学生時代にB.B.メソッドで学習した10名に対してインタビューを実施し，中学以降の英語学習にどのような影響が見られるのかが検討される。

第8章「結論」では、定型表現を繰り返し用いる教室内での活動を通して、週1回の授業であっ

ても、文法を明示的に教えずとも、基本的な文法知識が内在化され得ることを示したと本論文が総括され、それを基に現在の小学校英語教育に対して、1.定型表現を活用した指導の導入、2.暗示的知識と明示的知識をつなぐ指導の工夫、3.教材の見直しと授業時間の有効活用、4.教員の指導力向上と研修の充実、の４つの観点から示唆が与えられる。